
シーナの事情

イチル

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シーナの事情

【NZコード】

N4873Y

【作者名】

イチル

【あらすじ】

レキルス王国の王都ガレストラにある本屋『サクラ』を営むのは、日本から能力を持つて異世界トリップしてきた少女、田宮椎名。これは本屋（でも裏では情報屋）な彼女とそれを取り巻く周りの人達の友情恋愛その他もろもろの事情。＊＊＊＊＊毎回23時に更新します

1 彼女の事情

ガレストラは今日も賑わいをみせていた。

多くの歩行者による騒音の中に売り子娘の少し高めの声が響き、人々は思い思いの店で互いに有益になるよう買い物をする。

ある人が興味なさげに視線を外したモノを、他の人が輝いた瞳で見つめたり。

大金を軽く払う人もいれば、お金が足りずに溜息をつく人もいる。その顔は十人十色。

レキルス王国の主な産業は武器。

その王都であるこの街は、良い武器といえばガレストラ、と言われるほど有名で、それを扱う騎士たちの腕も大陸一だ。

そんな街だからもちろん殆どの店が武器屋。

そのかわり武器屋の競争率は激しいが、他の店の中には街に一軒しかない店などもあるので、そういう店は客を一人占めできるのだ。

そんな街に一軒しかない本屋『サクラ』を営んでいるのが、この私。

シーナ・ターミヤ、もとい田富椎奈。
たみや しいな

3年前、15歳のときに日本から異世界トリップしてきた本好きの少女だ。

この店は、その際に神様から貰つたもの。

本に関わる仕事につくのは小さい頃からの夢だつた。

もともと私は知識欲が他人と比べて凄くあり、世界の全てを知りたいと常々思っていた。

まあ、それは無理だとは分かつてはいたが。

体が弱く生まれた頃から入院中だった事もあり、よく本を読んでいたら段々とその魅力にとりつかれてしまった。

そんな所を神様に気に入られて強制的に異世界トリップさせられた。願いを3つ叶えてあげよう。

そう言われて、言った願いの一つ目が「本屋の店長になりたい」である。

どうやって叶えてくれるのかな」と思っていたら、トリップした先に助けたおじいさんが経営していた本屋を「もう自分は年だから」と言い、くれたのだ。

そのおじいさんは今、隣国にいる息子夫婦の元に住んでいる。

2つ目の願いは「身体能力の向上」。

理由は今まで外で遊んだ事があまりなかつたため、向こうではめいいっぱい楽しもうと思つたからだ。

あの神様はついでに魔力も最高にサービスしてくれた。

おもいきり楽しんでこい、と。

ちなみに隠しているが魔力量と質は世界で1番、剣技では宙に投げた玉ねぎのみじん切りを2秒でてるくらいだ。

チートやばい、そして便利。

おかげで今は異例の早さでギルドランクBだ。

3つ目は「その世界の全てが知りたい」。

国家の秘密から隣の家の晩御飯まで、全て。

そう言つたとき神様は満足気に微笑んで、一冊の本をくれた。

今、私の横においてある鈍色の本がそうだ。

表紙の絵も題名もない中身も白紙なこの本は、実はこの世界の知識の塊。

知りたいと思つた情報だけを載せてくれる神様特製の本。

例えば私が「あの人誰だけ」と思いながら本を開くと、その人物の名前と生年月日、家族構成や育ち方、周りからの評判まで書かれている。

プライバシー皆無もいいところ。

まあ、こんな能力もあって実は私は本屋件情報屋だったりする。

カラシノロン

「いらっしゃい、レオンさん。今日はどんな本をお探しですか?」

店の中に入ってきたのは少し波打つたサラサラの金髪に透きとある海色の瞳の美青年。

それはまるで御伽話に出でくる王子様のような…っていうか王子様だ。

正真正銘この国の皇太子であるレディオン・リンク・フルノ・レキルス殿下。

先ほどの『レオン』といふ名前は偽名だ。

彼はたまに病弱な妹姫のために身分を隠して本を買いにきている。勿論、私の情報本にかかる素性などすぐ分かるので、身分を隠しても意味がない。

別に誰これ構わず個人情報を見ているわけではなく、最初にこの店に来たときに平民と言つわりにはやけに身なりがいいから気になつたのだ。

「ここにちは、シーナ。今日も妹のために本を買ひに来たのだけれど…」

「じゃあ、この本なんてどうですか?今流行つてる恋愛小説。私のオススメですよ」

私が近くの棚から取り出したのは桃色の本。

ノイズとこうこの本の作者は他国の間でも有名で、毎回ベタで甘い

ラブストーリーを書くので女性受けがいい。

そんな大物小説家の彼女は私の友人でもあるのだが、この話はまたの機会に。

レオンは本を手に取りパラパラと中を見る。

そして、最後まで見終わつた後のこちらへ向ける視線はとても満足気だ。

それに対しても二ヶコリと微笑むと、途端にレオンの顔が真つ赤になる。

何故に？

たまにこういつた事があつたのだが、理由が分からぬ。

そのたびに王様つてポーカーフェイスが大切なではないのか、と彼の将来が少し心配になる。

そして、しばらくの間の沈黙。

2人ともが何を話そつか考えているときに、急に本屋のドアが勢いよく開いた。

「シーナいる？」

入ってきたのは茶色の髪をボニー・テールにくくつた女。

その手には朱色の宝石がついた銀色の杖。

彼女はアイリス・キュート。

Aランク冒険者の魔法使いの私の友人で、レオンの元クラスメイトである。

レオンが通つていた学校、となると一国の皇太子が通うよつた学校なのだが、彼女は実は孤児院出身だ。

魔力量の高さをかわれて無理矢理入学させられたらしい。

その卒業後には数多の勧誘を振り切って冒険者になり、今は各地を転々と巡っている。

彼女と出会ったのは私が暇つぶしにギルドで依頼を受けていたとき、討伐対象も倒してさあ帰ろうとこいつきに邪竜と戦っている彼女と出会った。

苦戦していたようなので手助けをしたのが切欠だつた。

といつ話は閑話休題、またいつか。

「こりつしゃいませ、アイリス。今回はどうなものをお探しで？」

助かつた、アイリス。

あの気まずい空気は苦手だ。

とりあえず、まだ顔がほんのりと赤いレオンは置いといて、アイリスの相手をしよう。

それにしてもレオンは美形だから頬を染めるところ女にしか見えない。

「ん？ レオンはいいの？ まあいや、この本の修理を頼める？」

そう言つて渡されたのは特に壊れた様子もない普通の本。

これのどこに直さないといけない所があるかといふと……そんなものは、ない。

だが私は困った顔もせず、逆にニヤリと笑つた。

「分かりました。少々お待ちください」

そういうと、私はその本と傍らの鈍色の情報本を持って店の奥に入つた。

さて、情報屋としての仕事がんばりますか。

『壊れた本を直してほしい』

それは私に情報屋としての仕事をしてほしい、という意味。

本の33ページ目に欲しい情報とお金を挟んで私に渡す。
私はそれを受け取り、そのお金に対応する情報を書き本の22ページ目にそれを挟み、密に渡す。

それが情報屋『サクラ』の利用方法である。

私はアイリスから受け取った本を開いた。

左下に33と記されているページには、ルール通りに紙と紙幣があった。

今回の依頼内容は『ローズ・テファ・メルシスについて』。

ついにここまできたかあ、と思う。

ローズ・テファ・メルシスというのはアイリスの生き別れの母親の事。

彼女の母親は隣国の侯爵家の末娘で平民の男と恋をしてアイリスができ駆け落ちをした。

しかし彼女の父親がそれを許さず、男を殺して末娘を連れて帰つたのだ。

母親は父親が来る事に気づき、父が来る前にアイリスを孤児院に預

けたのだ。

この事は神製の情報本で知ったのだが、多分彼女は孤児院の院長から聞いたのだろう。

取り出した紙に、もうここ3年で使い慣れた羽とインクを使って情報bruを書く。

本来なら個人情報、ましてや貴族の料金は高いのだが、アイリスは私の友人なのでサービスでいくつか情報を付け加えて、本に挟んだ。

店の方に出るとアイリスとレオンがなにか喋っていたがすぐに止まり、アイリスは少し緊張した顔でこちらに顔を向ける。あ、レオンの事を忘れていた。

「シーナ…見せてもらつてもいい？」

「どうぞ」

本を渡す。

その表紙には『護身術の全て』と題名が書かれており、毎回この本を持つてくるのが彼女らしい。

受け取った本をパラリとめぐり、22ページ目を開く。アイリスは内容を読み進めていき…泣きそうな顔になつた。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ

少し涙声になりながらアイリスは告げた。

そして、パタリと本を閉じて出入口に向かつ。

「『J利用ありがとうございます。次はお一人で来てくださいね』

頭を下げる。

すると、アイリスは吃驚したように目を開いて、その後笑いながら言った。

「分かった、ありがとうございます。…がんばれよ」

ん、何を?と思いつながらも店を出て行ったアイリスを見送った。

また、店内に沈黙。

残されたのは私とレオン。

案の定、彼は一連の出来事の意味が分からず頭にハテナマークを浮かべてこちらを見ていた。

私はそれに曖昧に笑う。

「本、買つていきますか?」

そう言って、桃色の恋愛小説を取り出した。

最後に、その日『サクラ』でノイズの新作が一冊売れた事と、後日銀の杖を持った魔法使いがもう一人女性を連れて来店した事をここに書いておく。

闇話 1 - アイリスの視点（前書き）

第1話のアイリス視点のお話です。

闇話 1・アイリスの視点

「シーナいる?」

私は扉が壊れるんじゃないかという勢いで店内に入った。ミシリと音がしたので少し心配になつたが、今はそんなことはないでもいい。

『サクラ』の中にはシーナともう一人、私の学友でこの国の皇太子でもあるレティオ・リン・フルノ・レキルスがいた。レティオは驚いたように此方を見たが、シーナは安心したように話しかける。

つていうか何でレティオは乙女みたいに頬を染めてんの?

「こひりしゃいませ、アイリス。今回はどうなものをお探しで?」
部屋にシーナの鈴のような声が響く。
レティオは放置するらしく。

「ん? レオンはいいの? まあいいや、この本の修理を頼める?」

渡したのはここを利用するときについている『護身術の全て』。この本しか持つていなかから仕方がないが。

「分かりました。少々お待ちください」

シーナは気のせいいか一矢と笑つて2冊の本を持って店の奥に入つた。

今回シーナに頼んだのはローズ・テファ・メルシスについての情報だ。

孤児院の院長から聞いたことだが、彼女は私の母親だという。なんでも切羽詰まつた顔でまだ生まれたばかりの私を預けに来たらしい。

「アイリスト本読むのか？」

隣に立つレディオンが聞いてくる。

「ああ、ここではレオンだけ？」

レディオンは彼女が情報屋である事を知らないので、皇太子だとバレている事も知らないのだ。

…こいつシーナの事好きなくせに何にも知らないな。

「友人に頼まれたんだよ」

「アイリストにそんな事頼む友人なんていたんだな」

「どういう意味」

「いや、別に」

レディオンの物言いに、少しイラつとする。

「ハツキリ言えよな」

「いいだろ、別に」

「そんなんだからシーナに振り向いて貰えないんだよ」

「な……っ！」

何故知つている、つていつ顔をしている。

いや、バレバレだから。

見ている方が焦れつたく、こちらとしては早々に彼らにはくつついでもらいたいのだが。

… そういえばシーナはこいつの事をどう思つているんだろう。

今度聞いてみるか。

ガチャ

レディオンが何か言いかけたとき、シーナが戻ってきた。

一瞬でレディオンの事を忘れ、シーナの方を見る。
手にある先程私が渡した本には、きっと情報が書かれた紙が挟まっている。

私の親の事が書かれた、紙が。

「シーナ…見せてもらつてもいい？」

「どうぞ」

本を受け取つてめぐる私の手は、情けない事に震えている。

そのページには、いろいろな事が書かれていた。

ローズ・テファ・メルシスの実家、家族、性格から駆け落ちした事、夫が殺されて子供をキート孤児院に預けた事。

そして――一番最後に書かれている事を見て、泣きそうになつた。

彼女は今も自分の子どもを探している。
貴方は望まれた子ですよ。

「…相変わらず、仕事が早くて…助かるよ」

シーナは知っていたのだろう。

私がその事を気にしていたのを。

孤児院にいる子は望まれない子が多いから。

「次はお二人で来てくださいね」

そう言ったシーナの声に、私は勿論と思いながら返事をした。

閑話　過去の話（前書き）

またまたアイリス視点の閑話です。
今回は椎奈とアイリスの出会いのお話です。

シーナは不思議な子だ。

彼女の経営する『サクラ』は本屋でもあり情報屋もある。私は本が苦手なのでそれは買わないが、情報屋はよく利用する。『サクラ』は全く外れない情報屋として裏ではとても有名だ。

私がシーナと出会ったのは今から約3年前。

依頼でとある森に住みついた邪竜を退治しに行つたときの事だった。今までに倒した事のある邪竜は上級魔法光魔法を放てば1発で倒せたので、今回もそれで大丈夫だと思っていた。だが、その邪竜は他のものとは桁外れに強く、私が今まで戦ってきたのは邪竜の中でも下位のものにすぎないと気づいた。どうやら私は自分は強さを自惚れていたらしい。

魔力切れで体が重くなり、どうしようかと悩んでいた頃、唐突に視界が光った。

そして鼓膜が破れるほどの爆音がなる。

同時に、反射的に目を瞑ついていたため見えなかつたが、微かに邪竜の苦しげな咆哮が聞こえた気がした。

音が鳴り止んで、恐る恐る目を開けると信じられない光景が瞳に映つた。

先程まで私が苦戦していた邪竜がいた場所には、その跡形もない巨大な黒い炭の塊があつた。

一瞬、思考が停止する。

「あ、大丈夫?」

視界の端にひょっこりと顔を出した少女が、私の顔を覗きこむ。艶やかな黒髪に宝石のように輝く黒眼。

整った顔立ちをして、どこか神秘的な雰囲気を出す美少女がそこにいた。

まさか、こんな少女が、邪竜を殺した?

「これは…あなたがやつたの?」

「うん、勝手に参加しちゃって」めんね。倒してよかつた?」

「いや…助かつたけど」

信じられない。

見たところこの子はエルフでも魔族でもなさそうだし、多分：人間だ。

人間のまだ10代前半くらいの子が邪竜、しかも中級以上の強さのそれに普通勝てるか?

答えは否、ありえない。

「怪我してるね」

そう言つた途端に私の体が光り、傷が治つていく。

この子はあんな強力な魔法を使った後に、まだ魔法が使えるのか?
しかも無詠唱で?

「あなたは誰？」

「私は田中…じゃなくて、シーナ・ターミニヤ。あなたは？」

「…アイリス・キュート」

この時の私は、まさかシーナが唯一の親友にならうとは思っていないかつた。

2 ハリシアの病

今日はお店の定休日だ。

ついでに、この世界の時間について説明しておく。

1年は365日くらいで6ヶ月、1ヶ月は約60日で、紫月、青月、緑月、黄月、橙月、赤月と並ぶ。

1週間は6日で、月の名前と同じよう、紫の日、青の日、緑の日……となる。

1日24時間、1時間60分、1分60秒というじくみ。
ほぼ地球と同じだ。

『サクリ』の定休日は毎月第一、第五の紫の日と青の日である。
今日は紫の日、つまり連続2日間の休暇の1日目。

する事は毎回決まっていて。

ギルドに行つて依頼を受けまくる。

そして運動しまくる、これにつきぬ。

休暇なら休んだ方がいいのかもしれないが、普段の仕事でカウンターに座つてのんびりする事が多いで休暇くらいは動きたい。

そして前の世界ではできなかつた事をしたいのだ。

*

*

ギルド内に入ると騒がしかつた室内が一瞬静まり返り、視線がこちらを向く。

だがそれも一瞬で、部屋はまた元の五円蠅さを取り戻す。

女性、ましてやまだ十代の子どもの冒険者は珍しいので仕方がないのかもしないが、ジロジロと私を見るのはやめてほしい。そう思いながら受付まで歩いていく。

「あら、シーナじゃないの。久しぶりね」

向かつた先にいるのは薄緑色の長髪をゆつたりと三つ編みにした優しげな女性。

私の馴染みのギルド受付嬢であるネリーだ。

年齢は25歳で夫と子どもがいる立派な母親なのだが、子どもが学校に通い始めて時間が空いのでギルドマスターである祖父に頼んで受付嬢をしているという、少し変わった人。

たまに夫との怠氣話や親バカな発言をしなければ、仕事のできる美人さんである。

「ネリーさん、何かいい依頼ありますか」

「そうねえ…あ、これなんてどうかしら。新作ケーキの試食、条件は十代の女性」

ペラリと私の前に差し出した紙の依頼者の欄には王宮御用達と呼ばれる超有名菓子店『パティス』の文字。
ちょっと…いや、かなり気になるが今回はやめておく。
とにかく今は運動したい、遊びたい。

…いや、べつに体重が気になるとかじゃなくて。

「…できれば討伐系でお願いします」

「あら、もつたいない」

彼女は紙をファイルにしまうと、別の灰色のファイルから似たような紙を取り出した。

確かにそのファイルは極秘の依頼とかが入っていたはずだ。

私に見せたそれには、とんでもない事が書いてあった。

脱走を手伝ってください

依頼主：エリシア・リンド・リア・レキルス

報酬：お互い話し合つて決めます

内容：みんなが過保護なので城の外に出れません。城下に行つてみたいので、その為の脱走を手伝つてください。

…この依頼主って、もしかして第一王女のエリシア姫ですか？

あ、この依頼内容を見た時点で、断る事はできないから。

ネリーにそう言われて泣く泣く受けたこの依頼。

第一王女の城脱走のお手伝いは、一步間違えれば王女誘拐事件の犯人となるほど危険な仕事だ。

信頼できる人にしか任せられないため困っていたらしいが、信頼されている事に喜べばいいのか、それとも面倒な依頼を押しつけられた事を悲しめばいいのか。

あと、これがバレたらレオンにどんな顔して会えばいいのか…。

「はあ」

鈍色の情報本を見ながら溜息をつく。

今見ているのは勿論エリシア姫の事。

犯罪者にならないためにも彼女の事は知つておかなければいけない。

エリシア・リンド・リア・レキルス

レキルス王国第一王女

金髪に緑の瞳をもつ10歳

幼い頃からクリエッタ病にかかりており、周囲の過保護により城をでた事がない

クリエッタ病つてなに？

思うと反対側のページに情報が出てくる。

以下の事は創造主にしか知られていない

クリエッタ病

体内の魔力の器が大きすぎるものが神竜の涙を飲むとかかる事がある
通常なら外に逃がす力まで受け止めようとするため身体が脆くなる
が、死ぬ事はない

患者は常に体の何処かに痛みを感じる

コリの果汁を聖水で薄めた薬を飲むと治る

この情報は神様しか知らない情報だつたらしい。
どうりで皆が「王女は原因不明の病にかかっている」と言つている
わけだ。

神竜の涙なんてそうそう飲めるものじゃないし、その力を全て受け
止めるほどの魔力量なんて世界に数人しかいないだろうから、当た
り前だな。

今まで発病した人がいなかつたのだろう。

しかし、コリの果汁か。

あの果実には確か食べた人の魔力の一部を体外に放つ効果があつた
はず、その効果を聖水で強めて身体に染み込ませるのか。
なるほど、普段は毒薬扱いされているから誰も飲ませなかつたのだ
な。

パタン、と本を閉じて傍らに置く。

依頼を受け（させられ）たのが朝の早い時間だったので、今は午前9時ごろである。

窓の外ではいつもの半分くらいの人が歩いている。

「どうやって迎えに行こうかなあ……」

依頼によるとエリシア姫は昼食を食べ終えた暁の1時に私の部屋に忍び込んで迎えに来てほしいらしい。

王城に忍び込むことの難しさを彼女は絶対に分かつていなかろう。ギルドの者かどうかは、私の胸元にある受付で渡された銀のペンドントで確かめる。

その後城下に脱走、いろいろ買い物をしたりして夕方6時の夕食までに城に帰るらしい。

もしも誰かにバレた場合は、王女がギルドの依頼書を見せてきちんと説明するそうだ。

すこい計画だ、普通のお姫様が考えるとは思えない。

「とりあえず、まだ時間があるから薬でも買つに行こう

実は、口つの果汁も聖水もそこらの店で買えるような物だったりする。

目の前に立ちはだかるのはこの国の中心である立派な王城。私は今からここに侵入するとこりがだ。

方法は簡単。

まず光魔法で透明になり、体の表面に魔力を纏つて城の周りを覆うバリアを通過。

そのまま風魔法で王女の部屋まで飛んでいく。

危険そうに見えるが、魔力量と質が世界一の私に不可能などない。

— * — *

というわけで、無事に到着。

バルコニーに降りると、窓から部屋の中の様子を伺う。

部屋にいるのはベッドに腰掛けた周りをキヨロキヨロとみている少女。

彼女がエリシア姫なのだろう。

情報通りの腰まであるさらさらの金髪にエメラルドの瞳の美少女だ。

部屋の周りを探ると何人か護衛の方が隠れてたので、彼等には王女が寝ている幻覚を見せる魔法をかけた。

そして、自分の光魔法を解いて窓をノックする。

コンコン

エリシア姫は吃驚したようにこちらを振り向き私の胸のペンドントを見ると、キラキラした目をしてバルコニーに近づいた。そして口パクで訴える。

ちょっとまつて、と。

彼女はそのまま隣の部屋へ入っていった。

しばらくすると王女が現れた。

王族が着ることはないよつた庶民の服装で。

少し驚いている私を気にせず、彼女はバルコニーの窓を開けて勢いよく私に飛びついてきた。

「依頼を受けてくれてありがとう！ねえ、早く行きましょうー！」

私に顔を向けるエリシア姫の頬は紅色に染まり、すこく可愛い。その笑顔につられるように私も微笑み、王女の手を取る。

「じつかり掴まつていて」

少女が頷いた瞬間、周りの風景が王城の一室から見慣れた室内に変わった。

足元には淡い光を放つ魔方陣。

エリシア姫は一瞬で場所が移動した事に驚いて、目を見開いて周りを見る。

「ここは私の家だから安心して。少し話し合いましょう」

セツ言つてソファに座るよつて受けたて促した。

「私の事はシーナと呼んでね、エリシア様」

微笑みながらエリシア姫の前にオレンジ色のジュースを置く。彼女はそれを恐る恐る口に運んで飲んだ後、美味しい、と呟いた。ありがとう、それは私が作ったジュースなの。

「エリシアでいいわ。そんな呼び方をしたら街で目立つてしまつ

「分かつた。じゃあエリシア、あなたは何色が好き?」

いきなりの質問の意味が分からぬ様子だったが、彼女は不思議そ
うな顔で「ピンク」と答えた。

すると、彼女の髪がピンク色に染まつた。

「えつー・すー」「ーー」

「魔法で髪と瞳をピンク色にしたのよ。帰るときには戻してあげる
から」

「うんー。」

笑うエリシアはまさに天使とした言いようがないほど可愛いくて、
レオンがわざわざ城下に来てまで本を買う理由がよく分かった。
こんなに可愛い妹のためなら、何でもしてあげたくなるはずだわ。

「シーナー、これほしー！」

城下町に行つたエリシアは、それはもつはしゃぎまくつた。

あれはなに？

これは？

かわいい！

ほしい！

おこしあづー

途中で、あれ？この子病氣じゃなかつたつけ？と何度も思つた。それを感じさせないくらい彼女は騒いで、その顔は幸せそつだ。

今回エリシアが指さしたのは銀のしおづ。

色の銀ではなく、材料が銀のしおりだ。

それには丁寧な装飾が施されており、上品な感じになつている。

右下には猫のシルエットがあり、猫の目の部分には緑色の小粒の宝石がはめられている。

「エリシアと同じ目の色ね。私が買つてあげる。お姉さん、これください」

女性の店員さんにお金を渡して商品を受け取ると、それをエリシアに渡す。

彼女は今まで食べ物を買つてもそれ以外は買わなかつた。持つて帰ると家族や侍女に怪しまれるからだ。だが、このくらいなら構わないだろう。

「あ、ありがとう…」

エリシアはうつりとじとじおりを見つめる。買つてあげて良かった、と思つていると、ふとエリシアが眉根を寄せる。

「エリシア、大丈夫？」

急にしゃがみ込んだ彼女が心配で、背中に手を当てる。そして、彼女の体が熱くなっている事と、魔力が漏れ出ている事に気がついた。

まさか、クリエッタ病の発作？

「……げほつ」

吐血。

エリシアの顔は真っ青で、それとは対照的に口にあてた彼女の手は真っ赤で。

本当は、この依頼は受けるべきではなかつたのではないかと、凄く後悔した。

焦つた私はエリシアを連れて急いで家に転移。机の上に置いたままにしていた透明な液体の入つたビンを掴み、エリシアに渡した。

「エリシアーこれ飲んで！」

言つた瞬間、エリシアはビンをひつたぐるよつに奪い、口に流しこんだ。

口から零れた液体が、血と混ざりピンク色になつて顎をつた。

「う、ああ、あ、あ、あ、ああああ、！…！」

彼女の喉がゴクリと鳴つた途端、叫びだしたエリシアから膨大な魔力が溢れだした。

チートな私でも冷や汗を垂らして近づく事さえできなくくらい大量な、濃い魔力。

多分、これはエリシアが今まで受け止めきれなかつた神竜の涙の魔力だ。

先程エリシアに飲ませたのはコリの果汁を聖水で薄めたクリエッタ病の薬。

今まで体内に溜めていた魔力が、薬のせいで一気に流れているのだ。

エリシアは今10歳。

10年分の魔力が一気に解放された彼女には激しい痛みがくる。子どもが耐えるような痛みはないはずだ。でも、私には見守る事しかできない。

自分の無力を感じた。

急にエリシアの悲鳴が止まつた。

そのまま気絶した彼女を、私は慌てて駆け寄つて支えた。

何時の間にか魔法が解けて金髪に戻つたエリシアの髪が、さらりと私の腕を滑つた。

エリシアはすうすうと寝息をたてていたため、死んではいないのだ
わづ。

彼女をソファに下ろすと、私は部屋を見わたした。

エリシアの魔力が勢いよく溢れたお陰で、部屋の中はぐちゃぐちゃになっていた。

あちこちに本が投げだされ、硝子の破片があちこちに飛び、机上ではインクが盛大に零れている。

だが、こんなときも魔法があれば大丈夫。

魔法というのはイメージが大切だから、数時間前まで綺麗だった部屋を想像しながら瞬きをする。

すると、一瞬で部屋は元通りに。

この世界の人間は詠唱しなければ魔法は発動しないと信じこんでいるため毎回長つたらしい言葉を並べるが、実際はそんな事ないのだ。まあ、それ相応の魔力が必要になるのも確かだが、私には関係ない。

ふとエリシアの方を見て、起きたときに目が覚めるように柑橘系のジューースを用意しておこうと思いついた。キッチンに向かった。

5時。

だんだん外が暗くなってきた。

やばい、6時までに城に帰せれるかな、と思いながらエリシアの髪を撫でていると、彼女の長いまつげがピクリと揺れた。

驚いて手を止めると、エリシアの目がゆっくりと開いた。中から見えたエメラルドの瞳は、状況を掴めずに左右に動いている。

それを見たとき、私も今まで緊張していたのだろう、糸が切れたようには涙を流し始めてガバリとエリシアに抱きついた。

「よかつたああ～」

エリシアはそんな私に困惑しているようだった。

それから暫くそんな姿勢が続いたが、我に返った私が慌てて体を離した事で終わる。

すごく恥ずかしい。

私の黒歴史が一件追加された。

エリシアとは反対側のソファに座り、起き上がった彼女にジュースを飲むよう勧めた。

「さて、エリシア体は大丈夫？」

ジュースを一口飲んだ彼女に聞く。

エリシアは頷きながら答えた。

「うん、大丈夫」

「どこも痛くない？」

「うん、どこも……あれ？どこも痛くない。なんで？」

エリシアは不思議そうに自分の体を見る。

その様子だと、薬はちゃんと効いたみたいだ。

クリエッタ病の症状の一つに患者は常に体の何処かに痛みを感じる、というものがある。

痛みを感じないという事は病気が治つたといつ事だ。

だが、それだと少しエリシアに言わなければならぬ事がある。

「エリシア、確かに依頼の報酬は話し合いで決めるはずよね」

「うん」

「私は報酬を受け取らない代わりに、貴方に黙つてもらいたい事が
あるの」

私は人差し指を立てる。

「絶対に私の事を他人に話さないで」

言葉に力を入れたせいか、エリシアの肩が恐怖で揺れた。
そしてコクコクと何度も頷く。

…そんなに冷や汗流すほど怖かった？
軽くショックを受けた。

— 木 —

その日、用事での会話(1)の問題で埋め verk wurden.

エリシア第一王女の病気が治った。

たが
何故治ヒたのかは分かルないシし

ある人は言う。

魔の森にすむ不老不死の魔女が氣まぐれに治したのだ。

それは他の人は云々

いや、神竜様が治してくれたのだろう。

他にも王女が自力で治した、実は病気だつた事は嘘だつた、などいろいろあつたが最終的に残つたのは、神様が治してくれた説である。どこから広まつたのかは分からぬが、彼女の病気は神が治した、エリシア第一王女は神様に愛された子である。

う。エリシアの魔力量が常人の数倍高い事もそれを手伝っているのだろう。

とにかく、今のガレストラではエリシア王女は聖女扱いされている。

2日間の休暇も明けた緑の日の正午ごろ。

私は用意していた昼食を食べ終えて、カウンターで本を読んでいた。

鈍色の情報本には、この本読みたいな、と思いながら開くと、その本の内容が一字一句違わずに書かれているという素晴らしい機能があるので、読もうと思えば誰かが綴つたラブレターまで読める優れものだ。

読んだ事はないけれど。

それはまあいいとして、本を読んでいるときに客が来た。
眼鏡をかけ、品のある服装に身を包んだ中年の男。
その男の事を知っている私は、あの事だらうなあ、と思いながらも笑顔で接客する。

「いらっしゃいませ」

「お久しぶりですねターミヤ嬢。ところで本の修理を頼めますか?」

入ってくるなりそれはないだろ?。
差し出された本を受け取って、その場でパラパラとめくる。
その行動に吃驚している様子の男は無視。
33ページ目にはやはり紙と大金が挟んであり、紙には予想通りの内容。

『エリシア王女の病気が治った件について』

それを見て心の中で溜息をついて、本を閉じてそのまま男に返す。

「申し訳ありません。その件については私も全く分からぬので」

「口封じでもされましたか？」

「なんの事でしょう？」

ニッコリ笑顔で対応。

間違つても、それは自分がしました、なんて言えるわけがない。
暫く見えない火花を散らした後、溜息をついたのは相手の男^{負けた}。

「……では次はこれをお願いします。代金はその本の分でいいです」

次に渡されたのは『ティガー伯爵家の最近の動き』についての情報^{』。}。
よし、諦めたか。

「かしこまりました。宰相さんも大変ですね」

そう、彼はこの国の宰相なのだ。

名前はロンド。

仕事に真面目だが愛妻家なのが有名で、最近は娘が嫁に行つた件で
一騒動あつたそうだ。

なんでも婿の家は隣国ロシエンの王族なのに剣で切りつけようとしたとか。

彼等は恋愛結婚なため、それも笑つて済ませたが政略結婚なら戦争なのだ。

結婚式の日は「小さい頃はパパと結婚すると誓っていたのに」と泣きながら言つていたらしい。

「貴方が楽に情報を渡してくれれば少しは楽になるのですが」

「なんの事やら分かりませんね。はい、ビツビツ」

会話中にも私は紙に情報を書いて本に挟みロンドに渡した。
勿論お金は回収済みだ。

受け取ったロンドはその中身を確かめた後、礼を言つて店を出いで
つた。

「今日も賑やかだなあ……」

ロンドが店の出入り口の扉を開けたときに漏れた街の騒音に、私は
少し苦笑した。

3 クッキーの日

まず生地を作つて麵棒で平に4//こくらじに伸ばしたら、それを型で抜いた後、魔法でキツネ色を田安に焼く。

「できた…！」

簡単クッキーのできあがり。

「わあ、すごい。食べていい？」

「いいよ、店番のお礼ね」

今この世界は、日本でこうとしたるの冬だ。
店の窓から雪が降る外の様子を見ているときに何の脈絡もなく、ふと思つた。

——甘いものが食べたいなあ、と。

けれど店を無人にするわけにもいかないから、一度よく店に来たアリスにしばらくの店番を頼んだ。

クッキーはプレーンとチョコの2種類を200個ほど作り、5分の1は自分用で残りは客に配る事にする。
5個ずつ袋に入れて可愛くラッピングして大きめの籠に乗せると、それをカウンターの横に置いた。

籠に白いリボンを結ぶと見栄えもいい。
うん、完璧。

「おいしい！」

隣ではアイリスがクッキーを頬張っている。

ああ、こぼさないようにしてよ。

店内にはいつも淨化の魔法をかけているので少々こぼしても大丈夫なのだが、せつかく作ったクッキーがもったいない。作った側としては最後のひと欠片まできちんと食べてほしいのだ。

カラントロン

「じんにじは」

しばらくすると学生服を着た客が来店する。ここは武器の街なので本を買う人は少ない。だから客の7割が学生だ。

幸いこの近くには大規模な学園があり、店は儲かっている方だと思う。

情報屋や、ギルドの依頼を受けたりもしているので尚更だ。特に情報料が結構高いので、1日で2万ニア（だいたい200万円）稼いだときは少し罪悪感を覚えた。

私は何も苦労してないのに、こんなに儲けて大丈夫なのか、と。

ちなみに、今でもその思考は抜けていない。

「これ買います」

わざわざ店に入ってきた学生が、2冊の本を持って私のいるカウンタ

ーに来た。

どちらも難しめの薬学の本である事から、彼女が薬師になりたい事が予想出来る。

学生からお金を受け取ると、それをポケットに入れるフリをしながら垂空間に仕舞い、本に刻まれている、勝手に本を店の外に持ち出されないための防犯術式を解除する。

そして、傍らの籠からクッキーの袋を一つ取り、本と一緒に彼女に渡した。

「当店を1J利用してくださった方に今日だけ配っているんです。よかつたらどうぞ」

ありがと、と言いながら彼女はそれを受け取る。

どこの世界の人間も限定品には弱いらしく笑顔で去っていく女学生に、心の内で宣言よろしくお願いします、と呴いた。

この後の時間帯にいつもギルドでバイトをしている彼女は、おしゃべりな性格で有名だから。

3 クッキーの日（後書き）

雪つて粉砂糖みたいでおこしありですね。

しばらく経つと、予想通り『サクラ』にいつもより多い客が来始めた。

といっても、普段は客がない事の方が多いので数人ほどだ。主に冒険者風の客が多いので、先程の彼女が宣伝おしゃべりをしてくれたのだろう。

その中には知り合いも含まれていて、会話をしながら会計をします。

「シーナはお菓子も作れるのね…。貴方に欠点はないのかしら?」

「ありますよ、マリア。ただ人前で見せないだけで」

今話しているのは黒髪赤眼の美少女。やはり冒険者風の服装をしているが、どこか気品溢れる容姿と喋り方をしている。それもそのはず、彼女はとある国の王族なのだ。

「でもシーに欠点なんて想像もできないわ。ねえ、兄様と結婚してくれない?」

「私が魔王と結婚なんて無理ですよ」

そう、魔王。

マリアは聖女みたいな名前をしているのに魔王の妹なのだ。まあ、マリアは偽名で本名はマリエーナ・ルトウ・キャディスなだが。

魔王は魔人の住む魔国の王の事。

魔人とは魔物を使って人々を襲うもの、と知られているが… そう思つてゐるのは人間だけだ。

本当は魔人と魔物には何の繋がりもなく、魔国にも魔物の被害は出でている。

彼等には世界征服などの野望もないし無闇に人間に狙われるのも嫌なので、魔人のほとんどは魔国に引きこもつてゐる状態だ。だが、同じく引きこもり種族のエルフや竜人とは密かに交流があるようだ。

魔人の特徴は頭に生えた角である。

魔人にとつて角は魔力を溜める場所だ。

その色はその人の魔力を表す色で、色が濃いほど魔力が強いそうだ。そして取る事も可能らしいが、数ヶ月たつとまた生えてくるらしい。魔人の多くは定期的に角を取り、もしものときのために保管している。

また人間と違い寿命も長いため、一見10代に見えるマリアは実は50代。

だが、これでもまだ若い方らしい。

「シーナなら大丈夫ですね。それとも兄様の事が嫌いなんですか？」

マリアがお釣りを受け取りながら不満気に言つ。

今回彼女が買つたのは『彼岸花』という、昔とある国で本当に起つたらしい後宮のドッロドロな話をかいした小説だ。

お買い上げありがとうございます。

それ、売れなくて困つてたんです。

「好きですけれど恋愛対象としてではないし、ハーブ様にはカチュア様がいますし」

「そうですね、カチュアもどうして兄様のお気持ちでござりかな
いのかしら?」

「の方は鈍感ですからね~」

「……………そうですね」

あれ?

今すぐい間が空いたな。

マリアは残念そうな顔をして、そのまま店を出て行った。
私はそれを不思議に思いながらも、ありがとうございましたー、と
彼女の背中に呼びかけた。

3・2（後書き）

マリアのあの間は「それ貴方がいいますの？」の間です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873y/>

シーナの事情

2011年12月29日23時16分発行